

FOCUS Next

地域医療の中核的な役割を果たし 血液疾患の最新・最適な治療を担う



村田 誠 先生 国立大学法人 滋賀医科大学 内科学講座 血液内科 教授 (滋賀県大津市)

国立大学法人 滋賀医科大学は県内唯一の医学系大学であり、滋賀医科大学医学部附属病院は特定機能病院として地域医療の中核的な役割を果たしています。同学の血液内科は2022年10月に独立した講座となり、多岐にわたる血液疾患の診療と研究、そして若手医師の教育を熱心に進めています。

独立した講座としてスタート 一通りの血液疾患治療を確実に提供

県内の患者さんは責任を持って支える

滋賀医科大学の内科は以前、第一内科、第二内科、第三内科で構成されていましたが、近年、臓器別診療科への改組が進められ、2022年10月、第二内科は消化器内科と血液内科に分かれました。その血液内科の初代教授が村田誠先生です。

「一人一人の患者さんに寄り添い、最新で最適な治療法を提供することで、地域の全ての血液疾患患者に『滋賀医科大学で治療を受けて良かった』と言ってもらえる診療科をめざしています」。研修医時代に他県から骨髄移植を受けるために紹介された患者さんを担当した経験から、一通りの血液疾患に対する治療を県内できちんと提供していくことは、当たり前のように見えて実は難しいと実感したという村田先生。まずそれを確実に実行しようと考えたといいます。

そのため、滋賀医科大学医学部附属病院の血液内科では「県内の患者さんは責任を持って自分たちで診ていく」という思いを胸に現在、白血病や悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、さらに再生不良性貧血や真性多血症、血友病などの遺伝性疾患を含め、幅広い血液疾患の診療に当たっています。また、患者さんに十分な医療を提供するにはある程度のスタッフ数が必要となることから、人員の確保に積極的に取り組んできました。実際に着任時には村田先生以外に5人だった血液内科医が、今は10人に増えています。

造血幹細胞移植数の増加と無菌室の増設

急性白血病や骨髄異形成症候群などの治療として、造血幹細胞移植の件数も増加しています。ドナーの造血幹細胞を患者さんに移植する同種移植の数は、2020年は年間11例、

2021年は12例、2022年は13例でしたが、2023年は21例と大きく伸びました。ただ、「これ以上の移植を行っていくためには、無菌室をさらに整備していく必要があります」と村田先生は話します。

造血幹細胞移植あるいは免疫機能が低下した患者さんの治療には無菌室が必要になりますが、現在同院にあるのは清浄度が高い高密度無菌室が2床、準無菌室が3床の計5床です。これまでは無菌室に入り切れない患者さんは一般病室で治療したり、他の病院に紹介したりすることもあったそうです。同院では来年度に高密度無菌室を3床増の5床にするほか、準無菌室も改築・増設して、将来的には17床まで増やす計画を立てています。

新たな治療薬や治療法を相次いで導入

村田先生は新しい治療薬や治療法の導入にも積極的です。同種移植ではドナー由来の免疫細胞が移植を受けた患者さんの細胞を異物と認識して攻撃する移植片対宿主病



血液内科では骨髄移植、末梢血幹細胞移植、臍帯血移植という3種類の造血幹細胞移植を全て実施することができます。(村田誠先生提供)

(GVHD)が起こることがあります。この合併症に対する再生医療等製品を新たに導入し、最近では慢性GVHD治療として体外で患者さんの白血球に光活性薬剤を添加して紫外線を照射する体外循環式光化学療法(フォトフェレーシス)も開始。この治療法が実施されているのは、全国でもまだ10施設もないとのこと。また、白血病や悪性リンパ腫に対するキメラ抗原受容体T細胞療法(CAR-T細胞療法)も準備中で、導入されれば県内初になります。

「当院はエイズ治療に対しても県の基幹病院になっており、白血病や移植だけではなく、大学病院として血液疾患全般における“最後の砦”とならなくてはいけないと考えています」と村田先生は強調します。

時代に合った診療・研究ができる環境へ血液内科の魅力を学生や若手医師に伝える

新しい検査法や治療法は血液内科から

「血液内科の魅力は、多くの新しい検査法や治療法が血液内科で始まっていることです」。血液内科は腫瘍学、免疫学、感染症学と広い領域に関わるとともに、染色体や遺伝子診断に基づいた治療は固形がんより早く、30年以上前から実施されていました。最近注目されるがん免疫療法についても、造血幹細胞移植がまさに強力な免疫療法であり、血液内科では50年前から行われています。CAR-T細胞療法をはじめ、さまざまな新しい治療法が血液内科で実用化され、そして固形がんなどに広がっているのです。

学生の講義や臨床実習では、「教科書の中だけにとどまらず、先端的なことも含めて血液内科の魅力を伝えています。そういった話をすると、学生の目はやはり輝きますね」と村田先生はうれしそうに語ります。

また、大学時代に部活でバレーボールをしていたという村田先生は学生たちとの接点を持ちたいと考え、率先してバレーボール部の顧問を引き受けています。学生との交流を深める中、早速、3年生の研究実習でバレーボール部員が血液内科を選択するなど、課外活動でも血液内科の魅力を伝え続けています。

働き方改革への対応が課題

2024年4月から開始される医師の働き方改革やワークライフ・バランスに対応するにはマンパワーが重要になります。血液内科は医師が増えつつあり、見通しは明るいものの、「いろいろな新しい価値観や多様性を受け入れていかないと、今の時代は回っていかないと考えています。そこにきちんと対応していきたいですね」。すでに時短勤務や男女問わず育児休暇の取得は行われており、週1回の症例検討会は就業時間内で行われるスケジュールに変更されました。

かつては朝から暗くなるまで臨床をして、夜になってから研究を始めていたといいます。「人材を増やすことで臨床業務を分散させ、可能であれば昼の時間帯に実験や研究に時間を割くことができるようにすることが望ましく、それが今後の課題だと考えています」と話します。

そういった対応の中でも村田先生が大切にしているのは、“相手を敬う”ことです。「できるだけその人の長所を見いだして、そこを最大限伸ばすようにしようと考えています。そういう姿勢は相手を敬う気持ちがないとできないと思います」。そして、チームとして最大限のパワーが発揮できるように心掛けていくといいます。

一昨年まで同院に血液内科の講座がなかったことから、県内の病院の血液疾患診療は近隣の大学病院の協力で成り立ってきたという経緯があります。そのため、これまで通り県内外の医療機関との連携を継続しながら、滋賀医科大学関連病院への派遣医師増員を進めていく考えです。



村田先生は「長所を伸ばす」ことをモットーに若手医師の育成に取り組んでいます。

★POINT★

- 2022年に独立した講座となった血液内科では県内の血液疾患診療の“最後の砦”をめざす。
- 造血幹細胞移植の件数増加に備えて、無菌室のキャパシティー拡大を計画。
- 慢性GVHD治療への体外循環式光化学療法など新たな治療法や治療薬を積極的に導入。
- 多くの新しい検査法や治療法が血液内科で始まる同科の魅力を学生や若手医師に伝えていく。